



4月27日、第1回みどりの式典において、天皇陛下から「おことば」を賜りました

「みどりの学術賞」受賞者が語る 森林の魅力、そして自然への想い

中 静 透

東北大学大学院生命科学研究科教授

草花が芽吹く春が
待ち遠しかった少年時代

僕は新潟県長岡市の出身です。冬になると、毎年二メートルくらいの雪が積もり、十二月半ばから三月までは、一面真っ白な世界に包まれます。ようやく春を迎えると、無彩色だった世界に、カタクリや山菜が顔を出す。それが子ども心に、美しく楽しいことのように感じられました。ひどいときには、一日に三回も服を

中 静 透（なかしずか とおる）

1956年新潟県生まれ。千葉大学卒。理学博士。森林総合研究所主任研究官、熱帯農業研究センター主任研究官、国際農林水産業研究センター主任研究官、京都大学生態学研究センター教授、総合地球環境学研究所教授、人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授を歴任し、現職の東北大学大学院生命科学研究科教授に。専門は森林生態学、生物多様性科学で、温帯落葉広葉樹林の動態と更新、熱帯林の動態、林冠生物学などを研究している。著書に『森のスケッチ』（東海大学出版会）など。



着替えるほど、野山で遊びまわろうな子ども時代は、今から考えると恵まれた環境だったのでしょうか。

本格的に森林に興味をもつたのは、中学生のときです。理科の先生に、植物図鑑には載っていない地元固有の植物を教えていただいたことをきっかけに、自然のおもしろさを感じました。今、子どもたちへの環境教育の必要性が議論されていますが、都会に住む子どもが僕と同じような体験をもつことは難しいかも

しれません。でも子どもは、大人のちょっとした働きかけや、森林のなかで過ごした経験をきっかけに、自然のおもしろさに気づくものです。僕も、学生たちには「まず外へ出よう。自然を楽しもう」と言い続けています。なぜなら、それがすべての出発点だからです。僕自身、大きな森に分け入ったときに感じる、人間の力など到底及ばないものに包まれるような感動は、研究を続けて三〇年たっても薄れることはありません。



新潟県・弥彦山のフィールドワークにて

樹木の一生を見つめながら 生物多様性の保全を考える

現在の研究についてお話すると、ひとつはマレーシアの熱帯林における生物多様性の研究です。五〇メー

トルの木々を見下ろせる、高さ八〇メートルのクレーンを使って、一・七ヘクタールの熱帯林を俯瞰し、とくに林冠についての調査を行っています。

もうひとつは、これも生物多様性

の研究に関連して、樹木の一生を追いかけています。一本の木はどのくらい種をつけ、どのように成長して死んでいくのかという、生命表をつくります。さらに、なぜ、日本海側にはブナばかりの森があるのに、太平洋側の森にはないのか、といったようなことを調べる過程を通して、たくさん種が共存できる条件とはなにかを研究しています。

そして、多様性の保全をより多角的に考えるために、植物・昆虫・鳥類の専門家、森林の利用を人間の側から考える専門家が集まり、プロジェクト活動を行っています。

森林を「使う」という発想が これからのキーワードになる

受賞の一報を受けたときは、ただ驚くばかりでしたが、大変光栄なことだと感謝しています。授賞式では、天皇后両陛下ともお話をさせていただきました。生物の分野にとっても詳しい天皇陛下から、研究者らしいご質問をいただき、お話が盛り上がったことは今でも印象に残っています。

私たちは森林とのつき合い方を考

える大きな分岐点にきていると思います。たとえば今注目を集める里山ですが、昔はそこで生活をする人が、燃料にする薪を拾ったり、肥料にする落ち葉を集めることで環境が整えられる理想的なシステムが成り立っていました。ところが、今は森林と人の生活が切り離され、それが森林への関心を失うことにつながっています。ボランティア活動も盛んになつてきましたが、その力に依存するだけでは、全国の里山を管理することは不可能でしょう。

僕の今後の目標のひとつは、新しい里山の創造です。里山のもつ有形無形の財産を、我々がいかに見出し、どのように使うのか。その財産とはときにバイオマスエネルギーであり、ときに癒しとしての空間でもあるでしょう。その現代的な価値をもつとたくさん見つけることによって人間の生活にどうつなげていくかを提案していきたい。それが、人間と自然との新しいつき合い方を考える契機になればと思っています。

内閣府
みどりの学術賞 ホームページ
<http://www.cao.go.jp/midorisho/index.html>